「嶋有義氏旧蔵王堂文庫本解説」捨遺

西　宮　秀　紀

嶋家より本図書館に寄贈された書籍（和書）を調査した結果については，簡単ではあるが図録『日本学の先駆者　アーネスト・サトウとB.H.チェンバレン』の「嶋有義氏旧蔵王堂文庫本解説」に述べた通りである。

図録解説を書くにあたっては，調査期間の短さの他に，限られた紙幅の中にいかに多くの情報を盛り込むかで苦労した。今回この紙面を与えられた機会に，調査過程で知り得たにもかかわらず，図録の紙幅の都合で割愛せざるを得なかった事柄について，若干述べておきたい。

それは蔵書印である。現在では自分の蔵書に蔵書印を押す人は，昔に比べて随分減ったような気がする。それは，本というものの存在価値が下落してきたことと大いに関係があろう。現在では古書店で本を手に取っても，押印のある本は，めったにお目にかかれなくなってしまった。また，押印や署名のある本は，その押印や署名が有名人であれば別の話だが，かえって汚れとして好まれないという話も聞く。かく言う私も一時期押印をしようとしたことがあり作ったこともあったが，いざ押す段になるといかにも仰々しく，また将来古書店に売却したおりに自分の押印本が店頭に並ぶのはあまり感じの好いものではない。何よりも押すに値する貴重本を贖ったことがないため，いつしか忘れてしまっていた。

ところが今回の和書を調査するさい，ベタベタと押された印文を判読できず悩んだ反面，印文から所有者が判明するに及んで，押印の威力に驚いた次第である。図録の解説を書くおり判読できない印文もあり，印文をすべて載せるべきか否かも悩んだが，ともかくどれだけの印が押されていたか，或いは一字でも判読できておれば，それを手がかりに判読できる識者もおられるのではないかと考え，敢えて印文全てを載せることにしたのである。

判読のおり，数冊の蔵書印譜や印譜辞典を片っ端から参照したが，最終校正の段階までそれは続いた。判読できれば何ということもないのであるが，この苦しみはこの仕事に従事した者しかわからぬであろう。まだ判読できていないものもあるが，判読できたいくつかの押印のうち，その人物の略歴が判明する者について，印影を掲げながら解説を行っておきたい。

「寛居」の印影

一番目は「寛居」の印影である。図録の表紙を飾ったので，御記憶の方も多いであろう。「寛居」は足代弘訓の蔵書印で，「ゆたい」とよむ。『国史大辞典』（吉川弘文館，1979年）などによると，足代弘訓は天明四（1784）年伊勢国山田で生まれた。幼名は慶二郎，通称権大夫であった。父は弘早（ひろとし）で，母は池田氏，幸子。足代家は代々伊勢外宮の祢宜の家であった。内宮の荒木田久老に入門し国学を習い，その後，本居大平・春庭にも学んだ他，律令・和歌・有職故実などを幅広く学んだ。足代弘訓は古典考証の研究も行ったが，本居系の学者の中では最も思想性が強く，時勢認識が鋭かったと言われている。天保の大飢饉の時には貧民救済に奔走し，大塩平八郎と親しく，天保八（1838）年の大塩騒動の折には大坂に召還され取り調べを受けた。また，志士とも交遊があり吉田松陰とも二度会っている。安政三(1856)年山田で病死した。時に年七十三。なお，自筆本・筆写本の多くは神宮文庫・宮内庁書陵部・無窮会神習文庫に所蔵されている。

今回嶋氏寄贈本の中には『往代希有記』（写本）・『年中行事　外宮』（写本）・『豊葦原神風和記』（写本）に「寛居」印がある。ただ，前二書は次に述べる度会範次の書写本であり，『豊葦原神風和記』には「寛居」印の他，表紙裏に次のような朱書きがある。図録では最初の三行だけしか載せなかったが，足代弘訓の思想や性格を窺う上で興味深いので，ここに全文を掲げておこう。

○此書僧慈遍の作なり　両部習合の説にてとり用ふへき事なく無用の書なり　但古書を引用したる所一授の為にハなるへき歟
○桜雲記巻中に興国元年北京暦往二年慈遍僧正神風和記三巻を作て献ずとあり
○南朝の書にて南朝の年号を用ひたり　南朝の事を考索するにハ所用あるへき歟　但奥書一洩斗なり歟　猶よく尋ぬへし

弘訓

「度会範次」の印影

二番目の度会範次の印影は図のごとく明確である。ただし，足代弘訓のように有名人ではない。度会の名から伊勢の神官の推定はついたが，既刊の辞書や系図などには見えておらず伊勢の神宮文庫を訪問してようやく判明した。そこで参考までに少し詳しく触れておきたい。宇野希次郎『神都の旧家　壱』（1929年）によれば大世古町の河井家の人で，

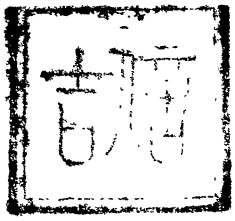
代々権祢宜の家柄であった。実父豊田正茂の五子で，母は上部左近貞僭の女。寛永八（1631）年正月四日生まれであり，同十八（1641）年十二月五日河井範隆の養子となった。養母は三日市与三大夫秀祐の女である。字は孫九郎で，後に元禄九(1696)年勘一郎，同十年正月に勘右エ門と改めている。寛永十九（1642）年十二月一日権祢宜となり，同月十九日に従五位下を授けられた。その後承応二（1653）年九月十一日に従五位上，寛文三（1663）年十二月三日に正五位下，延宝九（1681）年五月十一日に従四位下，貞享四（1687）年四月二十八日に従四位上，元禄三（1690）年正月十一日に正四位下に昇進し，同十（1697）年二月二日卒した。時に年六十七。谷弥一右エ門常国の女と結婚し，長男範国が万治元（1658）年五月二十五日に生まれているが，元禄二（1689）年六月十八日に年三十一で卒している。次男範尚は万治三（1660）年十月二十一日生まれで元文二（1737）年二月二十七日に卒している。ともに権祢宜であった。

「度会範次」印は，上記の『往代希有記』・『年中行事　外宮』にあり，前者は貞享三（1686）年四月に書写・校合したことが奥書にあり，後者は同年八月二十五日に書写・校合とある。したがって範次が五十六の時に書写したものである。

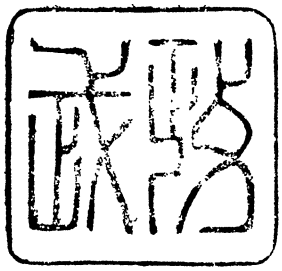
以上のことから伊勢神宮の権祢宜であった度会範次の書写・校合本（『往代希有記』・『年中行事　外宮』）は，同じく伊勢の足代弘訓の手に渡り，その後アーネスト・サトウへ，サトウからB.H.チェンバレンに譲られ，嶋家から本館に寄贈されたことになる。

三番目は，「信慶」の印影である。これは「信」の字が判明するまで苦労したが，信慶とは中西信慶のことであり，『校訂　伊勢度会人物誌』（古川書店1975)・『名家伝記資料集成3』（思文閣，1984）によれば外宮祢宜であり，寛永七(1630)年生まれで，元禄十二(1699)年に卒している。時に年七十。伊勢山田豊川町内前野に住んでいた。神学・歌道に通じ契仲と親交があった。幼名は信吉とあり，これによって，「信吉」印も中西信慶のことであると推定される。したがって上に述べた度会範次と，ほぼ同時代に生きていた人物であることがわかる。『外宮法式大概目録』（写本）には「信吉」印が，『祓勤仕儀式』（写本）には「信慶」印があり，いずれも神宮に関する古法や儀式伝授書であり，神宮に勤仕する祢宜にとっては必携とも言えるものであろう。

「信慶」の印影


「信吉」の印影

四番目の「政武」は比較的知られた印影である。『内閣文庫蔵書印譜』（内閣文庫，1969年）によれば，この印は北川政武の印で，文政六(1823)年生まれで安政六(1859)年に卒したと伝える。足代弘訓について古学を修め，神宮の木綿作内人という職階であった。天保・弘化ごろに神宮関係の古書・記録類を編修または謄写し，その巻末に自筆の奥書を加えたものが内閣文庫に多く伝えられている，とあるが，寄贈された『天照坐豊受皇太神神徳略記』（写本）には残念ながら印影しかない。


「政武」の印影

以上，寄贈本に押されていた印によって，B.H.チェンバレンの入手した写本のいくつかは，伝来をほぼ明らかにすることができよう。

少し堅苦しい話が続いたので，この調査を行っていたおりのこぼれ話を一つ。正月たまたま実家のある伊勢に帰省したおり，両親や妹の家族と食事をするため，近鉄伊勢市駅の北改札口で待ち合わせをした。予約した店に向かって皆でブラブラと歩いていたら，なんと突然眼の前に「国学者足代弘訓翁墳墓地」と記した石碑が現れたのである（写真）。

国学者足代弘訓翁墳墓地

「日本学の先駆者－アーネスト・サトウとB.H.チェンバレン」展の実行委員として昨年末に「寛居」印や足代弘訓の書き込み本を見ていなければ，恐らく見過ごしたかもしれない。伊勢市駅で降りたことがある人はおわかりだと思うが，外宮のある南改札口で降りる人が殆どで，まず北改札口から降りた人はいないであ

ろう。かく言う私も，これまで一度も駅の北改札口から出て付近を歩いたことがなかったのである。大学でこの話をしたら，足代弘訓の霊魂に引き寄せられたんじゃないか，と某先生に冷やかされてしまった。

なお，今回の嶋家寄贈本調査にあたっては，図書館職員諸氏の御配慮をいただいたが，特に岡本正貴氏には押印の読解にご協力をいただいた。また，英米文化コースの荒川邦彦先生から，神宮文庫での調査では西川順土先生から，共に種々の御教示を賜った。ここに記して改めて謝意を表したい。　（史学教室）